

大学院博士課程前期及び専門職学位課程における

自己点検とその改善に関する年次報告書（総評）

大学院統合生命科学研究科

1. 評価結果一覧

自己点検・評価単位	分析 項目 1-1-1	分析 項目 2-1-1	分析 項目 2-1-2	分析 項目 2-2-1	分析 項目 2-2-2	分析 項目 3-1-1	分析 項目 4-1-1	分析 項目 4-2-1	分析 項目 4-2-2	分析 項目 5-1-1	分析 項目 5-1-2	分析 項目 5-2-1
統合生命科学研究科	⑤	⑤	④	⑤	④	⑤		④	⑤	④	⑤	⑤
生物学 P	⑤			⑤	④		⑤	④	④		⑤	
食品生命科学 P	④			⑤	④		④		④			
生物資源科学 P	④			⑤	④		④		④			
生命環境総合科学 P	④			④	④		④	④			④	
基礎生物学 P	④			④	③		④	④			④	
数理生命科学 P	④			④	④		④	④				
生命医科学 P	④			④	③		③	④			④	

自己点検・評価単位	分析 項目 6-1-1	分析 項目 6-1-2	分析 項目 6-2-1	分析 項目 6-3-1	分析 項目 6-3-2	分析 項目 6-3-3	分析 項目 6-4-1	分析 項目 6-4-2	分析 項目 6-4-3	分析 項目 6-5-1	分析 項目 6-6-1	分析 項目 6-6-2
統合生命科学研究科	⑤	⑤	④	⑤	④	⑤	④	④	④	⑤	④	④
生物学 P				⑤			⑤		⑤		③	⑤
食品生命科学 P				⑤			⑤		④		④	⑤
生物資源科学 P				⑤			⑤		④		④	⑤
生命環境総合科学 P				④			④		④		④	④
基礎生物学 P				⑤			④		④		③	⑤
数理生命科学 P				④			④		④		④	④
生命医科学 P				④			④		④		④	④

自己点検・評価単位	分析	分析	分析	分析	分析	分析	分析
	項目	項目	項目	項目	項目	項目	項目
	6-6-3	6-6-4	6-6-5	7-1-1	7-1-2	8-1-1	8-1-2
統合生命科学研究科	④	④	④	④	④	③	③
生物学 P	⑤		④				
食品生命科学 P	④		④				
生物資源科学 P	④		④				
生命環境総合科学 P	④		④				
基礎生物学 P	⑤		⑤				
数理生命科学 P	④		④				
生命医科学 P	④		④				

(⑤十分に適合する ④適合する ③やや適合する ②余り適合しない ①適合しない)

2. 評価結果に対する総評

領域1 教育研究上の基本組織に関する基準

基準1-1 教育研究活動等を展開する上で、必要な運営体制が適切に整備され機能していること

分析項目1-1-1 教授会等が教育活動にかかる重要事項を審議するための必要な活動を行っていること

研究科の運営体制に対する自己評価は「⑤」であり、各プログラムの運営体制に対する自己評価は「⑤」が1、「④」が6であった。

研究科の運営組織は適切に整備されて機能している。

プログラム教員会は、2020年度はコロナ禍のなか例年の対面での審議が行えず、試行錯誤していたが、2021年度はオンラインと対面を適切に使い分け、十分な回数、高参加率で適切に活動したと評価した。

領域2 内部質保証に関する基準

基準2-1 内部質保証が有効に機能していること

分析項目2-1-1 自己点検・評価を行う上で必要な情報を体系的、継続的に収集・分析する取り組みを、学部ないしはプログラムにおいて実施し、その取り組みが効果的に機能しているかを検証していること

研究科の自己評価は「⑤」である。

研究科の自己点検・評価は、年次報告書や現況調査表を基に、プログラム長や各種委員会の委員長が

委員として参加している自己点検・評価委員会で行う制度であり、適切と評価した。

2020年度に作成した年次報告書では、研究科、および各プログラムの自己評価により「③」の評価項目が40、「②」、「①」の評価項目をあわせて7あった。2021年度は、それらの問題点を組織として認識し、すべての項目で改善を図った結果、「③」が7「②」「①」の項目はなしと大きく改善した。以上より、自己点検結果に基づいた改善システムが組織として有効であり、内部質保証のPDCAサイクルが効果的に機能していると評価した。

分析項目2-1-2 学生・修了生を含む関係者から意見を体系的・継続的に収集・分析することを行い、その意見を反映する取り組みを行なっていること

研究科の自己評価は「④」である。

修了時アンケートは毎年度実施し、回収率も高く、プログラム専門科目、研究科共通科目などの科目ごとの評価も行っている。在学生による授業改善アンケートと共に、教育改善に必要な情報を収集できしており、その結果をプログラム教員会、代議員会で審議している。

就職先アンケートは全学で実施する予定であり、その結果に基づいて代議員会で審議する予定であるので、現時点では④と評価した。

基準2-2 組織的に、教員の質及び教育研究活動を支援又は補助する者の質を確保し、さらにその維持、向上を図っていること

分析項目2-2-1 成績評価や学生指導について教員会等で情報共有を図り改善していること

研究科の組織的評価に対する自己評価は「⑤」であり、各プログラムにおける自己評価は「⑤」が3、「④」が4であった。

2020年度は、指導状況を組織として把握し、情報共有する取組は不十分であったが、2021年度は、授業内容と成績評価、および指導状況報告書に基づいた学生指導の状況については、プログラム教員会で審議して情報共有したのち、研究科として代議員会で審議し議事録を公開することで、研究科全体で情報を共有するシステムを構築し、実施した。これは大きな改善点である。このシステムを運用した結果、いくつかのプログラムで問題点を認識して対応を図っているが、研究科全体として対応すべき大きな問題点は、現時点ではないことが確認できた。

分析項目2-2-2 大学、学部、プログラム等において開催されるFD研修会などに参加し、その内容を教員会等で共有して、教育・研究の改善に役立てていること。

研究科の活動に対する自己評価は「④」であり、各プログラムにおける自己評価は「④」が5、「③」が2であった。

2021年度は研究科によるFDを4回行なった。各プログラムでFDへの参加を促し、教育・研究の改善に役立てた。また一部では学部のFDへの教員の参加も推奨した。

領域3 情報の公表に関する基準

基準3-1 教育研究活動に関する情報が、適切に公表されることにより、説明責任が果たされていること

分析項目3-1-1 学部、学科、プログラム等の目的、入学者受入方針、教育課程の編成・実施方針及び学位授与方針が適切に公表、周知されていること（教職員及び学生含む）

研究科の自己評価は「⑤」である。

大学や研究科のホームページ、学生便覧、入試の募集要項で適切に公表、周知されている。

領域4 施設及び設備並びに学生支援に関する基準

基準4-1 教育研究組織及び教育課程に対応した施設及び設備が整備され、有効に活用されていること

分析項目4-1-1 自習室、グループ討議室、情報機器室、教室・教育設備等の授業時間外使用等による自主的学習環境が十分に整備され、効果的に利用されていること

各プログラムによる自己評価は「⑤」が1、「④」が5、「③」が1であった。

学生の研究場所が複数の建物に分かれており、教育設備の研究科としての整備を行っていないが、建物ごとに旧専攻や学部の設備、共通機器などを有効に活用している。学習環境は、おおむね整備されていると評価できる。

基準4-2 学生に対して、生活や進路、経済面での援助等に関する相談・助言・支援が行われていること

分析項目4-2-1 学生への履修指導、学習、生活面、経済面等に対する支援が適切に行われていること

研究科の自己評価は「④」であり、新入生ガイダンス等を独自に行っている5プログラムにおける自己評価はすべて「④」であった。

研究科の新入生ガイダンスは、日本語と英語で行い、海外にいる学生もオンラインで同時に参加し、質問にもその場で返答した。学習、生活面の支援は主指導・副指導教員と支援室で適切に対応している。経済支援は、学生支援機構等の奨学金や大学による支援に加えて、研究科でもTAやRA、海外派遣など財政的に可能な範囲で行い、修了生の9割が何らかの経済的支援を受けていた。

独自のガイダンスやOBとの交流を図ったプログラムも、同等の自己評価であった。

分析項目4-2-2 障害のある学生、留学生、その他特別な支援を要する学生に対する生活支援等を行う体制を整え、実施していること

研究科の自己評価は「⑤」であり、留学生への便宜を図っている3プログラムによる自己評価は「④」であった。

障害等のある学生は、アクセシビリティセンターと連携して各支援室で適切に対応している。

留学生への支援も指導教員と各支援室を中心に個別に行っており、2021年度は留学生全員が標準修業年限内で修了したことから、十分な支援が行われたと判断した。留学生の礼拝に便宜をはかっているプログラムもあった。

領域5 学生の受入に関する基準

基準5-1 学生の受入が適切に実施されていること

分析項目5-1-1 入学者受入方針に沿った、適切な体制により受入が行われていること

研究科の自己評価は「④」である。

研究科とプログラムのアドミッションポリシーにそった入試が適切な体制で実施されている。ただし、分析項目5-1-2 に記載するように、コロナ禍で状況が大きく変化するなか、毎年度改善を行っているので⑤ではなく④とした。

分析項目5-1-2 入学者受入方針に沿った、学生の受入が実際に行われているかどうかを検証するための取り組みを行っており、その結果を入学者選抜の改善に役立てていること

研究科の自己評価は「⑤」であり、独自の検証を行っている4プログラムによる評価は「⑤」が1、「④」が3であった。

コロナ禍で状況が大きく変化するなか、毎年度改善を適切に行っている。特に生物工学プログラムは、出題について独自の改善を行った。3つのプログラムでは、入試の検証、改善はプログラム選出の入試委員を通して研究科の入試委員会での審議にゆだねており、プログラム単位での分析項目の記載はない。

基準5-2 入学者数が入学定員に対して適正な数となっていること

分析項目5-2-1 入学者数が入学定員を大幅に超える、または大幅に下回る状況になっていないこと

研究科の自己評価は「⑤」である。

2021年度の入学者数は、入学定員の99%であった。

領域6 教育課程と学習成果に関する基準

基準6-1 教育課程の編成及び授業科目の内容が、学位授与方針及び教育課程方針に則して、体系的であり相応しい水準であること

分析項目6-1-1 教育課程の編成及び授業科目の内容が、体系性を有しており、授与する学位に相応しい水準となっていること

研究科の自己評価は「⑤」であった。

修了時アンケートの結果、授業や教育に対する満足度とスキルや学力の学習成果が十分であることから、教育課程の編成及び授業科目の内容は、学位授与方針及び教育課程方針に則して、体系的であり相

応しい水準であると判断している。

一方、研究科発足から3年が経過し、教員の退職、新任の赴任、学問や社会のニーズの変遷が蓄積してきたこと、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシーが2021年度に軽微であるが修正されたことを受けて、2021年度はカリキュラムの見直し、授業科目の内容の精査を行った。2022年度の改善のために、いくつかの授業科目について2021年度中に変更の準備を整えた。2022年度初頭にそれに基づいて新たなモデルカリキュラムを作成し、学生に公開している。

分析項目6-1-2 学位論文(特定の課題についての研究の成果を含む)の作成等に係る指導に関し、指導教員を明確に定めるなどの指導体制を整備し、計画を策定した上で指導することとしていること

研究科の自己評価は「⑤」である。

指導体制は、他のプログラムの教員を必ず含む複数指導制であり、適切である。

研究指導計画の策定については、2020年度は組織としては把握していなかったが、2021年度後期から入学後に提出する研究題目届を用いて指導計画の策定と副指導教員との共有を確認し、その後の指導状況は指導状況報告書で定期的に研究科内で共有・確認をする制度を構築し、運用している。

基準6-2 学位授与方針及び教育課程方針に則して、適切な授業形態、学習指導法が採用されていること

分析項目6-2-1 教育課程の編成・実施方針に基づいて教育課程が体系的に編成されており、分野の教育に相応しい授業形態や学習指導方法等(研究・論文指導など)が整備され、授業の方法及び内容が学生に対して明示されていること

研究科の自己評価は「④」である。

教育課程の編成・実施方針に基づいて教育課程が体系的に編成されており、分野の教育に相応しい授業形態や学習指導方法等が整備されていることは、分析項目6-1-1、6-1-2で評価しており、授業の方法及び内容はシラバスにより学生に明示されている。

基準6-3 学位授与方針に則して、適切な履修指導、支援が行われていること

分析項目6-3-1 学生のニーズに応え得る履修指導・学習相談の体制を整備し、助言、支援が行われていること

研究科全体に対する自己評価は「⑤」であり、各プログラムでの指導、支援に対する自己評価は「⑤」が4、「④」が3であった。

各プログラムで、指導状況報告書と修了時アンケートの結果に基づいて審議し、学生のニーズに応えた指導、助言、支援が行われたと判断した。その結果を代議員会で検討した結果、研究科全体で問題なく行われていることが確認された。

分析項目6-3-2 社会的・職業的自立を図るために必要な能力を培う取組を実施していること

研究科の自己評価は「④」である。

社会人基礎力と生命科学分野で自立に必須な基礎能力を養成する研究科共通科目等を多くの学生が受講した。

分析項目 6-3-3 障害のある学生、留学生、その他履修上特別な支援を要する学生に対する学習支援を行う体制を整え、実施していること

研究科の自己評価は「⑤」である。

障害等のある学生に対しては、アクセシビリティセンターと連携して各支援室で適切な支援を行っている。

留学生への支援も、指導教員と各支援室を中心に個別に行っており、授業や行事もすべて英語対応となっており、留学生全員が標準修業年限内で修了したことから、十分な支援が行われていると判断した。

基準 6-4 教育課程方針に則して、公正な成績評価が厳格かつ客観的に実施されていること

分析項目 6-4-1 分野の教育方針に照らして成績評価や単位認定が実施され、教育分野において有効なものになっていること

研究科全体に対する自己評価は「④」であり、各プログラムのカリキュラムポリシーに基づく自己評価は「⑤」が3、「④」が4であった。

各プログラム教員会で授業科目の成績評価や単位認定がカリキュラムポリシーに則っており、現時点で大きな問題は生じていないことを確認し、その結果を代議員会で共有した。また、修了時アンケートでも研究科全修了生の9割以上で学習成果の向上が見られたことから、2021年度の内容が教育分野で有効なものであると結論した。

分析項目 6-4-2 成績評価基準を学生に周知していること

研究科の自己評価は「④」である。

成績評価基準は、シラバスに明記している。

分析項目 6-4-3 成績評価基準に則り各授業科目の成績評価や単位認定が厳格かつ客観的に行われていることについて、組織的に確認していること

研究科全体に対する自己評価は「④」であり、各プログラムでの確認に関する自己評価は「⑤」が1、「④」が6であった。

2020年度は、成績評価や単位認定について組織的に確認していなかったため、2021年度にはプログラム教員会で確認し、その結果を代議員会で確認するという制度を構築した。新制度により、各プログラムで2021年度の授業科目の成績評価や単位認定について審議し、それが厳格かつ客観的に行われたことを確認し、その審議結果を代議員会で審議し、研究科の議事録の形で全構成員と共有した。

基準 6-5 大学等の目的及び学位授与方針に則して、公正な修了判定が実施されていること

分析項目 6-5-1 学位論文等、修了認定に係る評価基準が策定され、学生に周知されており、適切な

審査体制の下で修了認定が実施されていること

研究科の自己評価は「⑤」である。

学位授与の判定基準及び学位論文の評価基準は学生便覧に明記され、入学時から学生に周知していること、および論文審査、修了認定は、他プログラム教員を含む複数の審査委員による委員会で審査され、代議員会で審議して判定している。

基準 6-6 大学等の目的及び学位授与方針に則して、適切な学習成果が得られていること

分析項目 6-6-1 進学や就職等の進路の状況から学習成果が認められること

研究科の自己評価は「④」であり、各プログラムによる自己評価は「④」が5、「③」が2であった。

各プログラム教員会で修了時アンケートと進路情報に基づいて審議し、適切な学習成果が認められたことを確認した。その審議結果を代議員会で審議し、研究科として学習成果が認められると判断した。

分析項目 6-6-2 教育分野で求められるスキルの伸長度、修了や資格取得の状況から学習成果が認められること

研究科全体のアンケート結果に基づく自己評価は「④」であり、プログラムごとに集計したアンケート結果に基づく自己評価は「⑤」が4、「④」が3であった。

各プログラム教員会で修了時アンケートに基づいて審議し、適切な学習成果が認められたことを確認し、その審議結果を代議員会で審議して、研究科として学習成果が認められると判断した。

修了時アンケートでも学習成果に関係する項目では、研究科全体では、「あてはまる」と回答した割合は「外国語運用能力が向上した」以外は9割以上であり、研究科の教育で学習成果が認められると判断した。「外国語運用能力が向上した」は75.9%であり、2020年度の71.8%より向上したが、さらなる対応が必要なため、自己評価は⑤ではなく④である。

分析項目 6-6-3 学習の達成度や満足度における学生からの意見聴取の結果、学習成果が上がっていること

研究科全体のアンケート結果に基づく自己評価は「④」であり、プログラムごとに集計したアンケート結果に基づく自己評価は「⑤」が2、「④」が5であった。

研究科全体では、修了時アンケートで「あてはまる」と回答した割合は「大学院で受けた教育について満足している」「広島大学で学修できて良かった」という項目にそれぞれ96.4%、97.1%であり、満足度は高かった。また、各プログラム教員会で修了時アンケートに基づいて修了生の学習の達成度や満足度について審議した結果についても代議員会で審議し、研究科として学習成果が認められると判断した。

分析項目 6-6-4 修了生や進路先における関係者からの意見聴取の結果、学習成果が認められること

研究科の自己評価は「④」であった。

修了時アンケートによると、修了生は高い学習成果を認めていることから評価した。

就職先アンケートは今年度大学が実施予定であり、その結果に基づいて研究科で審議する予定である。

分析項目 6-6-5 研究に対する取組みや研究成果の発表について、学生の成長を促す仕組みと評価基準が設けられており、効果（論理的思考、国際性、発表力など）における成長が認められること

研究科全体についての自己評価は「④」であり、各プログラムごとの自己評価は「⑤」が1、「④」が6であった。

修士論文発表会の他、前期1年目に修士論文中間発表会を行い、研究成果の発表スキルの向上を図っている。2021年度は英語対応、オンラインで実施した。修了時アンケートでは、「中間報告会は、研究に役立った」の項目ではまるとの回答は85.6%と、2020年度の70.3%を上回り、高い数字であった。また、効果に関する項目でも、「あてはまる」と回答した割合はいずれも2020年度と同程度の高い値であり、大学院教育によるこれらの能力の向上が見られた。

各プログラム教員会でも修了時アンケートに基づいて修了生の成長について自己評価して高い評価を得ており、その結果を代議員会で審議し、研究科として学習成果が認められると判断した。

領域7 教育の国際性に関する基準

基準7-1 キャンパスの国際化及びグローバル人材育成の取組が、体系的に行われていること

分析項目7-1-1 学部、学科、プログラム等において、適切な体制により留学生の受入が行われていること

研究科の自己評価は「④」であった。

新入生ガイダンスは英語でも実施しており、授業も、修士論文発表会、中間報告会もほぼ完全に英語対応である。留学生は日本語母語学生と同等の教育を受けており、入学者に占める留学生の割合も14.8%であった。

分析項目7-1-2 学生への留学プログラム等の周知及び履修指導等の支援が適切に行われていること

研究科の自己評価は「④」である。

新入生ガイダンスやもみじ等で周知されていることから判断した。2020年度は留学した学生がいないので、支援は行っていない。

領域8 リカレント教育の推進に関する基準

基準8-1 リカレント教育を推進するための工夫、社会人向けプログラム、初等中等教育との連携や生涯学習の取組が体系的に行われていること

分析項目8-1-1 リカレント教育の推進に寄与するプログラム(短期プログラムや履修証明プログラム等)が公開されていること

研究科の自己評価は「③」である。

広島県外に在住する博士課程後期社会人学生の修学支援として、本学に通学するための交通費を支援する制度等、全プログラムで社会人学生を受け入れる体制を整え、それを公開している他、ゲノム編集プロジェクトでは社会人向けのシンポジウムやセミナーを実施しており、さらに研究科シンポジウム、国際シンポジウム等の社会人向け活動、研究科シンポジウムをはじめ社会人も参加可能な多くのオンラインイベントを実施して公開のリカレント教育に貢献している。

分析項目 8-1-2 社会のニーズを踏まえたプログラムが整備され、適切な指導體制を構築していること

研究科の自己評価は「③」である。

コロナ禍の中、リカレント教育に関する社会のニーズは大きく変化していると想定される。現時点では、新たな社会のニーズがある程度確定した後に、アフターコロナ社会に適応したリカレント教育のプログラムの整備が行えるよう、情報収集と準備を行うことが適切な対応と判断している。